

2025 年 3 月 24 日

武蔵野美術大学 学長 殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	永井 天陽	所属	彫刻学科研究室
		職位	助教

研究課題	洞窟壁画～現代美術まで、芸術の変遷を辿る調査
研究先機関	バルセロナ現代美術館、カタルーニャ美術館、カサ・ビセンス、サグラダ・ファミリア、ダリ美術館、ビルバオ・グッゲンハイム美術館、コルドバ現代美術センター、アルハンブラ宮殿、メスキータ、プラド美術館、ティッセン・ボルネミッサ美術館、ソフィア王妃芸術センター、スペイン国立考古学博物館 他
主な滞在地 (国・都市名)	スペイン・バルセロナ、ビルバオ、マラガ、グラナダ、コルドバ、マドリード
渡航日程	2025 年 2 月 13 日 ～ 2025 年 3 月 11 日 (27 日間)
研究目的・理由	スペインは芸術・文化遺産の保存に注力してきた国であり、旧石器時代に描かれたアルタミラの洞窟壁画をはじめ、グラナダやコルドバなどで見られるイスラム建築、アントニ・ガウディの前衛建築、近現代美術館など、国内各地域において芸術の変遷を辿ることができる。特にガウディが手がけた建築の数々、ビルバオ・グッゲンハイム美術館に収蔵されているリチャード・セラの大作「The matter of time」、そしてアルハンブラ宮殿を見てみたい。私は日常の違和感や出来事、また気になる素材などをきっかけに作品を制作している。そのため本研修では、多様な文化が共存し混ざり合うスペインの地で、一つ一つの芸術や文化をリサーチしながら、モチーフや素材、そして制作に対するヒントを探っていくことを目的とする。
研究成果発表予定 (展覧会、著書、論文発表等)	2025 年 9 月に都内ギャラリーにて開催予定の展覧会にて、研修で実際に目にした芸術や建築、文化、景色、出来事などをきっかけとした新作を発表する。

バルセロナ

【バルセロナ現代美術館】

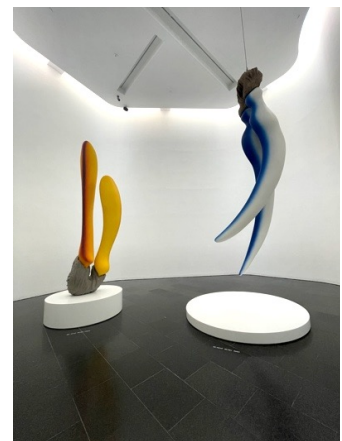
バルセロナ現代美術館は 20 世紀後半の作品を収蔵しており、若手アーティストの展覧会も積極的に企画している美術館だ。



美術館外観

研究内容

今回の訪問では、マドリード出身のアーティスト、テレサ・ソーラーの個展を鑑賞した。空間を大胆に使いながらもどこか不穏な静けさのある作品群は、プロペラのような工業的な構造にも見えるが植物の種や新芽のようでもあり、そして生物の身体の一部や内蔵のようにも見えてくる。静物と生物の中間的な在り方に留まっている形のように感じた。セラミックや樹脂を素材としているようで、質感や色味、また展示構成も新鮮で感動した。展示会場には作品の他に、作家のアイデアやメモ、関連資料などがまとめられたユニークなスケッチブックが展示されていた。目を通してみると、ドローイングやコラージュ、スクラップなどを独自の感覚を混じえて記録し、思考を整理している様子が見える。記録された言葉の全てが分からなくても不思議と感覚的な解釈ができ、作家や作品への理解が一層深まった。



テレサ・ソーラー展



スケッチブックとマケット

研究内容

【カタルーニャ美術館】

カタルーニャ美術館は国立宮殿内に設立されており、ロマネスク、ゴシック、バロック、ルネサンス、アール・ヌーヴォーといった各様式、そして近現代の美術を年代順に辿るように鑑賞することができる。到底1日では見切れない膨大なコレクション数に圧倒された。興味を惹かれるものをたくさん発見したが、ここでは13世紀に作られた彩色木彫の聖母子像に焦点を当てる。フレスコ技法で彩色が施された木彫は他にも多数展示されていたが、この聖母子像は瞳に反射する光、そして冠の宝石の煌めきまでもが描き込まれている点が特徴的だった。より自然で人間らしい姿を追求した表現のように感じられた。



美術館外観



聖母子像

【ダリ劇場美術館】

バルセロナ市内から電車で1時間半ほど離れた街、フィゲラスはサルバドール・ダリの故郷である。人気の少ない穏やかな街中を歩いていると、突如強烈に風変わりな建築が見えてくる。ダリ自身が生前、建設に携わった「ダリ劇場美術館」だ。美術館自体がシュルレアリズムの巨大な作品のようであり、えんじ色の外壁一面にはパンの形のレリーフ装飾が施されている。屋上を見上げると、黄金の人体彫刻と真っ白な卵の彫刻がずらっと交互に並ぶ。ここではダリの初期作品から、メカニックと絵画を組み合わせたような実験的な作品、そしてダリがコレクションしていた作品までが一同に展示されており、建物以上に奇妙な作品群をじっくりと鑑賞することができた。



ダリ劇場美術館の外観

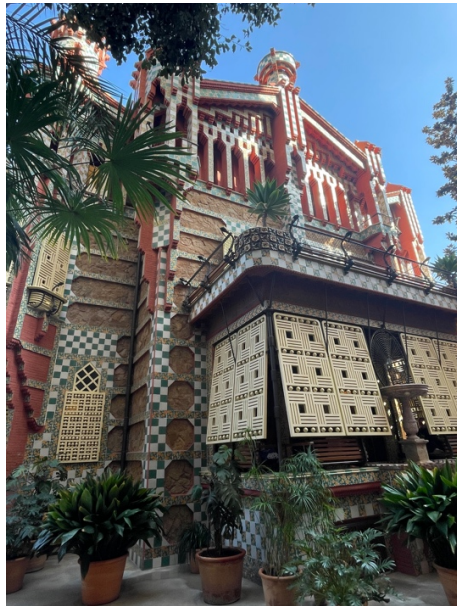


中庭の景色

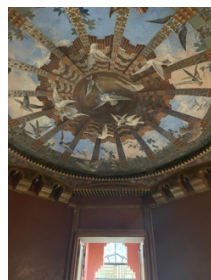
研究内容

【アントニ・ガウディの建築】

バルセロナ市内にはアントニ・ガウディが設計した建築が複数ある。今回はグエル公園、グエル別邸、カサ・ビセンス、カサ・ミラ、カサ・バトリョ、サグラダ・ファミリアの6ヶ所を巡った。それぞれ建てられた年代やデザインは異なるが、いずれも動植物から着想を得ている構造や遊び心あるデザイン、鮮やかな装飾が施されている点が共通している。特に印象深かったカサ・ビセンスとサグラダ・ファミリアについて下記に記す。



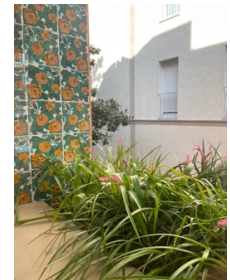
カサ・ビセンス外観



鳥の絵



植物の装飾



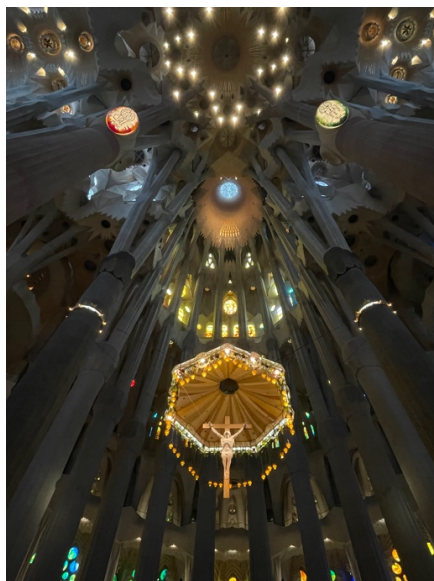
花柄のタイル

カサ・ビセンスはガウディが初期に手がけた建築で、ビビットな色合いと直線的なデザインが目を引く。ロッジの小さな噴水のせせらぎ、そして庭園の植物と建物の存在感が合わさって、まるで都市の中に突如現れたオアシスのような空間だった。建物に足を踏み入ると、壁面や天井などにはツタ植物をモチーフとした装飾が施され、窓の近くやドーム型の高い天井などには数々の鳥が描かれていた。小窓を覗いてみると、壁面の花柄のタイルと窓辺の花が重なり合っていたりもする。広く開かれた窓の外の景色とそれらの装飾が混ざり合い、まるで建物の内と外の境界線がグラデーション状に曖昧になっているようだった。私自身の作品も物の境界や内外の境界線を引き直すような表現を用いているため、ガウディ建築との意外な共通項を発見することとなった。

研究内容



サグラダ・ファミリア外観



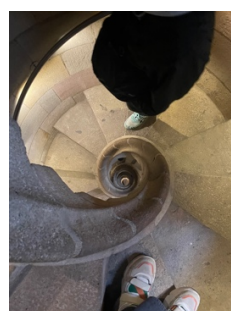
空間に浮かぶキリスト像



ステンドグラス越しに差し込む光



シャコ貝の聖水盤



貝のような螺旋階段



設計ラボの様子

サグラダ・ファミリアは入り口から入ってすぐに別世界のような空間が広がる。しばらく言葉を失って見入ってしまうが、落ち着いて細部に目をやるとガウディの建築の特徴とも言える動植物からのインスピレーションがあちこちに現れていた。巨大な森の木々のような柱、木の实のような形の塔、貝殻のような曲線で永遠に続く螺旋階段、シャコ貝を用いた聖水盤などが例として挙げられる。また、柱の隙間から木漏れ日のように降り注ぐ照明の光や、ステンドグラス越しに差し込む自然光は造形との調和が美しく、見えないものの存在を示唆するようでもあった。私の次の制作では彫刻と照明との構成を考察する必要があり、その上でもサグラダ・ファミリアの視察は予期せぬ刺激となった。

研究内容

ビルバオ

【ビルバオ・グッゲンハイム美術館】

まるで巨大な彫刻作品のような建築を特徴とする、ビルバオ・グッゲンハイム美術館。ここではルイース・ブルジョア、ロバート・ラウシェンバーグ、ジェフ・クーンズなどの作品を見ることができる。

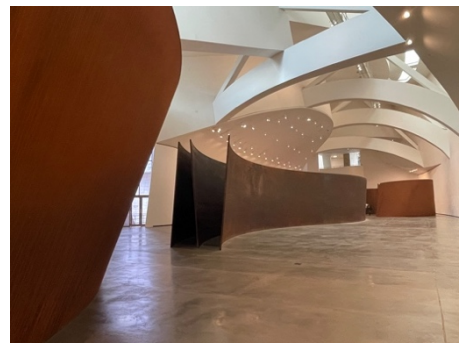
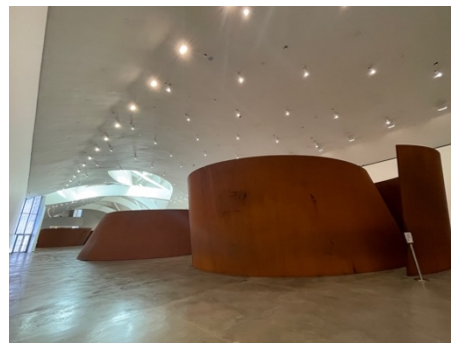


美術館外観



ジェフ・クーンズ「Puppy」

美術館には彫刻家リチャード・セラの大規模な作品「The matter of time」がコレクションされている。今回の研修で特に見たかった作品の一つだ。厚み 50mm ほどの鉄板を素材としているが、素材の硬質感と重量感をつい忘れてしまうような形で佇んでいる。作品は床面に固定されておらず、自重で形を保っている。比較画像から分かる通り非常に大きな作品で、外側から鑑賞していると私の方へ迫ってくるような緊張感がある。どの作品も内側へ入ることができ、複雑な螺旋構造の中に足を踏み入れると、両側面の鉄板が近づいたり離れたたり、時には急な角度が付いたりと間隔が流れるように変わる空間が続く。薄暗い作品内を歩き回っていると、いつかの遠い夢を見ているような不思議な感覚を覚えた。マケットを視察できたことも貴重な経験となった。



リチャード・セラ「The matter of time」



作品と私のサイズ比較画像



セラ作品のマケット

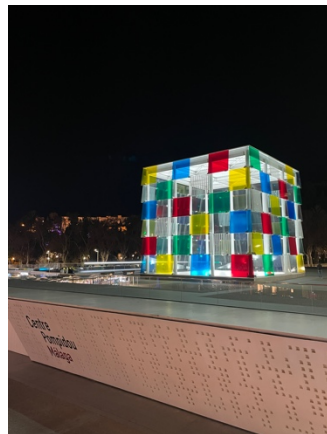
研究内容

マラガ

【マラガ・ポンピドゥーセンター】



パブロ・ピカソの故郷であるマラガの街



美術館外観



常設展の展示会場

マラガ・ポンピドゥーセンターはマラガ港のすぐそばに設立されており、カラフルなキューブ状の建築が特徴的だ。この美術館は2015年～2025年までの期間限定での開館のようだが、フランスのポンピドゥーセンター初の海外分館となる。コレクション展は約70点ほどの近現代作品で構成されており、リチャード・ロングやジュゼッペ・ペノーネ、ヤニス・クネリスの彫刻、そしてディヴィット・ホックニーの絵画などを鑑賞した。

研究内容

グラナダ

【アルハンブラ宮殿】



宮殿の一角



ライオンの中庭



「二姉妹の間」のムカルナス天井

丘の上に建つアルハンブラ宮殿は私の名前のルーツになっている場所ということもあり、幼い頃からいつか行ってみたいと思い描いていた場所だ。グラナダはかつてイスラム王朝の都として繁栄した地である。宮殿の中には住宅、市場、モスクや学校などが整備されていたようで、2000人以上が暮らしていた。歴史を調査しつつ、王朝の栄枯盛衰に思いを馳せながらリサーチを行った。特に、宮殿内の「二姉妹の間」で初めて見たムカルナス天井に圧倒された。ムカルナスとは鍾乳石を意味しており、鍾乳石のように垂直方向へ突出するような幾何学的な装飾が特徴だ。全て石膏や漆喰で作られている。石膏は普段よく扱う素材なのだが、ここまで繊細で強度を持った表現ができることに改めて驚く。窓から差し込む淡い光が装飾の立体感をより鮮明にしていた。

研究内容

コルドバ

【メスキータ】

世界遺産に登録されているメスキータは過去4回に渡る増築を繰り返しており、現在国内唯一の巨大なモスク建築となっている。元々はイスラム教のモスクであったが、13世紀に内部に礼拝堂などが作られカトリックの教会となった。えんじ色と白色に着色された水道橋のような二重のアーチ構造が特徴的で、入り口付近が一番歴史が古くモスクの雰囲気が色濃く残されている。そこから内部を散策して行くと、突如巨大な礼拝堂が現れる。イスラム教とキリスト教、異なる2つの宗教が特色を残しつつ混ざり合う不思議な場だった。



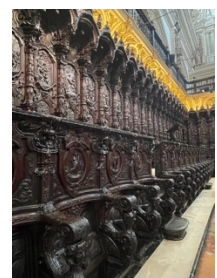
川の向こうにメスキータが見える



入り口付近の様子



増築された部分



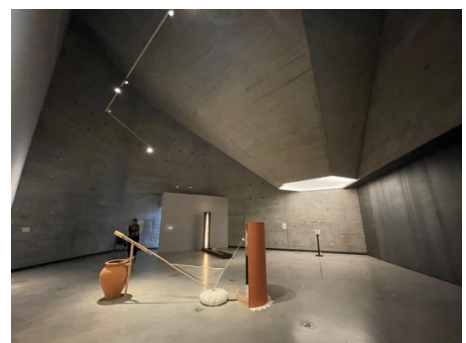
礼拝堂

【コルドバ現代美術センター】

コルドバ現代美術センターは、上空から見ると大小様々な六角形の展示室が連結しているような構造の建築である。各展示室に入ると、展示室と同じ形をした天窓から自然光が差し込む美しい空間だった。今回の研修では、コルドバやアンダルシア出身の若手アーティストによる企画展「Meditations around the foreign」を鑑賞した。



美術館外観



企画展の様子

マドリード

【プラド美術館】



美術館外観



シグマー・ポルケ展のポスター

プラド美術館は絵画や彫刻など 15000 点以上のコレクションを所有しており、フランシスコ・ゴヤの「我が子を食らうサトゥルヌス」、ディエゴ・ベラスケスの「ラス・メニーナス」などの傑作が数多く展示されている。今回は丸 1 日かけてコレクション展とシグマー・ポルケの企画展を鑑賞した。

研究内容



作品は撮影禁止だったので、画像は「快樂の園」の絵葉書

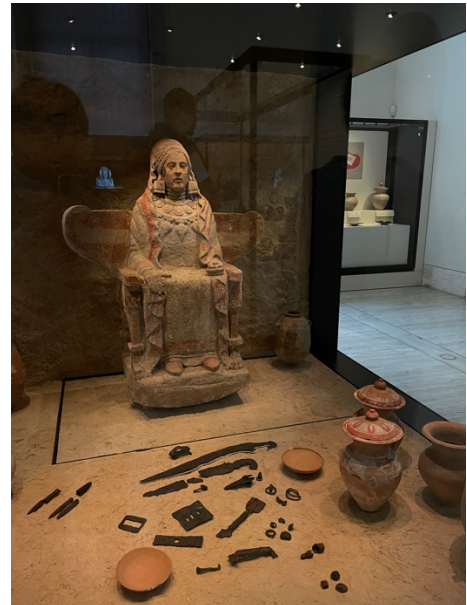
数あるコレクションの中でもヒエロニムス・ボスの作品に強く惹かれた。ボスの作品は世界で 25 点ほどしか現存していないが、プラド美術館はそのうち 10 点のボス作品を収蔵している。一際目を引く「快樂の園」は最も謎が多いとされる作品だ。この作品は世界が創造された 3 日目を表現しており、地球のようなものが描かれた扉を開くと、3つのパネルそれぞれに罪をテーマにした場面が描かれている。作品の至る所に人間と動物、木の実などがユニークな組み合わせとなって描かれている。ボスの作品を意識して彫刻を作ったらどうなるだろう…と、作品の構想を練りながら鑑賞した。これまで図版でしか見たことが無かった作品を実際に見ることができ多くの刺激を受けた。これからの制作活動に影響してくると思う。さらにボスの表現をリサーチしていきたい。

研究内容

【国立考古学博物館】



博物館外観



王座の中に火葬された骨が収められている



骨壺だった説がある彫刻



卵型の骨壺



雄牛のカノプス壺

マドリードの国立考古学博物館は紀元前～近現代に至るまでの資料が年代順に展示されていた。企画展ではエジプトのミイラや出土品の展示も視察することができた。どれもとても興味深く時間が足りないことが惜しまれたが、特に骨壺の出土品に興味を持った。私が約10年前から取り組んでいるシリーズ作品「metaraction」は、骨壺の存在や成り立ちに興味を持ったことが制作のきっかけとなっている。考古学博物館でも様々な骨壺をリサーチできた。時代や地域、信仰によって弔い方法は違えど、生前の肉体から離れた故人の存在を別の容器に移し替え残そうとするような行為は、人類に共通していることが分かる。人物彫刻の遺骨入れや卵型の骨壺などはこれまで見たことがなく、制作資料として今後調査してみたい。

その他、制作のヒント

植物



ハツミドリの巨大な花



鮮やかなハナチョウジ



野生のサボテン



椰子の木の根元



枝が繋がる木



極楽鳥花



オレンジの木

研究内容

スペイン各地で気になる植物を発見した。南部のマラガなどは南国原産の植物が多く、オリエンタルな色合いや見慣れない形態の植物が目立った。葉の部分に対してとんでもなくアンバランスなハツミドリの花は摩訶不思議であった。他にも、林の中から唐突に野生のサボテンが顔を出していたり、街路樹として植えられているオレンジの木から落ちた果実が路面にゴロゴロ転がっていたり…。元々植物に興味を持っているが、普段だと植物園で鑑賞するような風変わりな植物が道端に生えている違和感も面白く、記録を残した。

研究内容

ヘンテコな景色、出来事



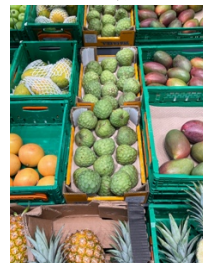
建築の改修工事中、外壁だけ保存してある



要塞と同じ模様の目隠しシート



鳩に混ざるインコ



見慣れない果物



コウノトリの巣



道端のアリの巣

研修中に見つけたヘンテコな景色、見慣れない食べ物や動物、興味を持った文化なども記録している。私は日常の違和感や出来事、また気になる素材などをきっかけに作品を制作をしている。こうして記録している何気ない要素が、後に繋がりあって新たな形を持つかもしれない。

大学授業における
研究成果の還元

今回の研修にて各地域の美術館で鑑賞した作品、美術館や教会などの建築、目にした文化や景色などの資料を用いて講義を実施する。

研究日程（全滞在期間）

出発日	出発地 (国・都市名)	到着日	到着地 (国・都市名)	研究内容等	滞在 日数
2/13(木)	日本/羽田	2/14(金)	スペイン/バルセロナ	バルセロナ現代美術館、カタルーニャ美術館、ミロ美術館、グエル公園、ダリ劇場美術館、モンセラット大聖堂、モンセラット美術館、カサ・ビセンス、カサ・ミラ、カサ・バトリョ、サグラダ・ファミリアなどを視察	7 日
2/21(金)	スペイン/バルセロナ	2/21(金)	スペイン/ビルバオ	ビルバオ・グッゲンハイム美術館、ビルバオ美術館、ビスカヤ橋などを視察	4 日
2/25(火)	スペイン/ビルバオ	2/25(火)	スペイン/マラガ	マラガ・ポンピドゥーセンター、マラガ・ピカソ美術館、マラガ砦などを視察	2 日
2/27(木)	スペイン/マラガ	2/27(木)	スペイン/グラナダ	アルハンブラ宮殿、グラナダ大聖堂などを視察	2 日
3/1(土)	スペイン/グラナダ	3/1(土)	スペイン/コルドバ	メスキータ、アルカサル、コルドバ現代美術センターなどを視察	3 日
3/4(火)	スペイン/コルドバ	3/4(火)	スペイン/マドリード	プラド美術館、国立考古学博物館、ソフィア王妃芸術センター、ティッセン・ボルネミッサ美術館、各ギャラリーを視察	6 日
3/10(月)	スペイン/マドリード	3/11(火)	日本/羽田	移動	
備考					

以上

※ 欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。

※ その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。